

名詞文にみられる属性叙述の 3 タイプ —統合関係に着眼した分析を中心に—

中村真衣佳

本発表では、これまで一括りにされてきた名詞文「A が B だ」で表される属性叙述には 3 つの下位タイプがあることを主張する。「花子が北海道生まれだ。」「子供が溺れかけた。」は、どちらも「A が B だ」文で表される名詞文である。しかし、これら名詞文の意味機能に注目すると、「花子が北海道生まれだ。」が静態性に傾いているのに対して、「子供が溺れかけた。」は動態性に傾いていることがわかる。

従来の研究では、佐久間鼎 (1941)『日本語の特質』(育英書院)、三上章 (1953)『現代語法序説』(刀江書院)で述べられているように、名詞文は属性叙述文、動詞文は事象叙述文に代表されると考えられてきた。しかし近年、影山太郎 (2012)「属性叙述の文法的意義」(影山太郎(編)『属性叙述の世界』pp. 3-35 くろしお出版)、益岡隆志 (2016)「叙述の類型と名詞文の構造」(福田嘉一郎、建石始(編)『名詞類の文法』pp. 215-232 くろしお出版)では、属性叙述と事象叙述の機能間の連続性が指摘されている。

そこで、本研究では「A が B だ」文の意味機能が属性叙述と事象叙述の連続性においてどちらかに傾く要因を解明することを目的として分析をした。分析は、「A が B だ」文の「B」に置かれる名詞句の語構成という形態的観点と統語的観点に着眼して行い、品詞間の連続性にも注目した。

主な結論は、「A が B だ」文で表される属性叙述には、(1)「時間的限界性をもたない普遍的事実を示すもの」、(2)「時間的限界性を持ち静態性がみられるもの」、(3)「性質や特徴に時間的に展開する動態性がみられるもの」があるということである。本発表では、これらを(1)「恒常的属性叙述」、(2)「準属性叙述」、(3)「事象性叙述」と名付けて、名詞文「A が B だ」で表される属性叙述は 3 つに下位分類できることを主張する。